ヤコブス・ホイエルとホメロス研究
—「フィロロギカ」の歩みとともに— 第1章

久保正彰

ヤコブス・ホイエルは、17世紀後半オランダの古都ユトレヒトに本拠をもつ法曹家であり、古代ギリシア文学の研究者であった。彼のホメロス研究の足跡研究は、今日まで5年間にわたる「フィロロギカ」研究会の進展と奇しくも歩みを共にしつつ進められてきた。最初は全く雲をつかむような探索であったが、その後の遅々たる研究の成果にたいして報告発表の機会が毎年与えられてきたことは、報告者にとってはこの上ない励ましとなった。今回、現段階に至る探索経過をまとめて、「フィロロギカ」の読者諸賢のご高覧に供するに際して、同研究会の幹事諸氏から賜ったご好意に対して、ここに深甚の感謝の意を表したい。

ヤコブス・ホイエル (Jacobus Goyer, 1651 ～ 1689) が、ギリシアの詩聖ホメロスの研究に没頭していたのはその短い生涯の最後の数年間であった。かれが引用している約100種の文献の中で、最も年代の新しいものは、1689年ユトレヒトで刊行されたC. サルマシウス著 (L. サルマシウス編),『同名異種の薬草論』初版からの一節である。この事実から推して、かれのホメロス研究はその没年まで続けられており、その時点ではなお未完であったことがわかる。

ヤコブス・ホイエルのホメロス研究をわれわれに伝えているのは、かれの論文や著作・翻訳の類ではない。かれが残しているのは、1517年のアルド版『ホメロス作品集』の欄外余白に記入した、ギリシア語・ラテン語 (一片はフランス語) による約500片の注記と、行間に附記した約2,000片に及ぶ訂正記号である。後者はアルド版の誤植、誤綴、脱字を初め、句読点や疑問符の是非をも指示する詳細を極めたものである。注記の頻度、訂正記号の丁寧さは必ずしも濃淡一様ではないけれども、『ホメロス作品集』に収録されている『イリアス』『オデュッセイア』『蛙鼠合戦』『讃歌集』の詩作全編にわたって附記されている。しかし『ホメロス伝』の諸篇などの散文記述には注記は施されていない。また、欄外注記に先んじて、まず詩作品の各巻、各篇には、ヤコブス・ホイエル自身の朱筆で詩行数が欄外右側に附記されている。行数が、かれ自身の数えによるものであることは、稀にではあるけれども、数え違いが散見される事実から推定される。

ホメロス叙事詩の物語りの進行の順を追って附記されている断片的メモや記号が、かれが残している全てである。ヤコブス・ホイエルのホメロス研究の全容、いやそのごく一面でも、これらの断片的資料をもとにうかがい知ることが出来るであろうか。もし、かれがホメロス研究を一巻にまとめたものが、かつては存在していたが、今は湮滅してしまった、という状況であれば、残っている覚書きやメモをもとに、幻の著作の復元を試みることも困難ではあろうが、不可能ではないだろう。しかし全体の構想が示されたこともないものを、メモや記号の断片的集積から推定できるであろうか。

以下の調査報告は、ヤコブス・ホイエルのホメロス研究の完成図の復元を意図す

るものではない。かれが最終的に明示しえなかったかれのホメロス像を、われわれの想像力によって創りだそうとするものではない。そうではなくてただ、かれ自身が明細に記録しているホメロス研究の資料を正確に理解することを目標とする。かれがどのような文献資料を参考としていたのか。その一々を、どのような角度から観察しているのか。出来るかぎりその点を明らかにしていきたい。かれの生きた17世紀末の欧州諸地において、ようやく形成されつつあった古代ギリシア文学研究の道筋の上の、どの位置に、かれの欄外注記があるのか、あわせてその点をも明らかに出来れば幸いである。そのような考えから、本稿の表題も、“ヤコブス・ホイエルのホメロス研究”とはせず、“ヤコブス・ホイエルとホメロス研究”とした。

ヤコブス・ホイエルの肉筆注記を記載したアルド版『ホメロス作品集』を発見、入手したのは、1994年夏ブリュッセルの古書店であった。その注記の内容は、古代より17世紀までの間に、ホメロスの詩句について何らかの言及をしたり、あるいは翻訳(ラテン語訳)、あるいは模倣した諸々の詩人文人や研究者たち80余名の諸作110篇余からの抜萃ないしは言及からなっている(この人数と作品数は概略のものであり、数え方によって多少の変動がある)。注記事項の総数は、ホメロス全作品を通じて、約500片、全て欄外余白に同一の筆跡で記入されている。その他に約2000箇所に及ぶ訂正記号が行間余白に記入されているが、これらについては、後段別項において報告することとしたい。

欄外余白の注記の出典追跡と内容確認の手立ては、主として次の二種の資料によって与えられた。

(I) 東京大学文学部西洋古典学研究室所管の「チャールズ・ブリンク文庫」の蔵書6,000巻、とりわけ、1500年～1750年間に欧州諸地で刊行された約350種の古代ギリシア、ラテン文献とその研究書、これは、1994年死去されたケンブリッジ大学ラテン文学教授、チャールズ・ブリンク氏が、残したものである。その集書構成については、岩波書店「図書」01年5月号に概略が記されているが、なお詳しくは、「フィロロギカ」第一回の研究会(01年11月8日、於北海道大学開催)において説明の機会を与えられている。次にこの蔵書集成と、ヤコブス・ホイエルの足跡追跡との交錯点について、簡単に記しておきたい。

ブリンク文庫を一見して目立つ特色は、第一は、ブリンク教授の学生時代より終生の関心事であり研究課題でもあった、アリストテレスとその学派諸流に関するもの。続いてこの流れを継承したキケロ、ホラチウスらの、ラテン語文人、詩人、思想家たちの諸作。そして第三の集成としてベルリン大学の恩師、同僚、弟子たちの主たる業績やミュンヒェンの「古代ラテン語集成」編纂に直接関連をもつ文献類。そして教授が第二の故郷と定められた英国のギリシア・ラテン学研究史を飾る大学者たちの代表的著作を網羅するものが最後の一群となっている。

これらの中に、17世紀オランダのヤコブス・ホイエルがホメロス研究に用いた文献の殆ど全てのものが含まれていた、ということは俄に信じがたく思われるかもしれない。しかしブリンク教授が鋭意集められた1500～1750年の刊行になる諸巻は、西洋古典学のDNAとも称すべき研究を網羅している。例えばI.カソボン校訂注釈のディオゲネス・ラエルティウスの『哲学者列伝』(1615)、同じくストラボンの『地誌』

(1620)、スエトニウス『皇帝列伝』(1595) などの名著がそろっている。いずれもヤコブス・ホイエルが頻繁に引用しているものと同年同版のものである。これらの古典諸作はヤコブス・ホイエルの時代から今日まで、異なる編者・校訂家たちの手を経て、幾度も版を重ねてきているのであるが、かれのホメロス研究の後を追う為には、どうしても、かれが用いた版本と同一のものが必要となる。ブリンク教授のコレクションはその点で、正に無二の助けとなったのである。少し詳しく説明したい。

かれのホメロス本の欄外注記にはしばしば、ギリシア・ローマ古典作家の言葉—つまり古典作品の本文そのものが記されている。例えば『イリアス』1. 234 ～ 39 の欄外には、“これに倣ってワレリウス・フラックスは次のように語る”として『アルゴナウティカ』3. 707 ～ 711 の本文を記している。また『オデュッセイア』1. 1 ～ 5 の欄外には、“これらの詩行はホラチウス『書簡詩』1. 2 において次のごとくにラテン語に訳されている”として同詩の 18 ～ 22 詩行が記されている。いわば‘本歌取り’ともいうべき形で、ホメロス詩句に源泉を仰ぐ、後世作家たちの作品からの引用文が、欄外に記されているのである。

これだけのものであれば、殆どどのような版本をもちいても、ヤコブス・ホイエルの注記、ひいてはかれの知的背景の探索は可能であろう。しかしかれの欄外注記の半ばは、そのような‘本歌取り’の類ではなく、特定の校訂家ないしは注釈家が、自分独自の研究や解釈として附記している部分に注目している。上記のカソボンのストラボン『地誌』では、ヤコブス・ホイエルの注意は、ストラボンよりもカソボンの注記に傾いている。版をおこし、注釈を施した学者の意見や研究が、欄外注記の中心を占めることになる。

例えば、T. スタンレーの『アイスキュロス悲劇集』校訂・注釈が引かれている『イリアス』2. 326 ～ 9 では、アイスキュロスはさして問題ではなく、注釈者スタンレーが、1628 ～ 9 年に刊行された「アルンデルの大理石碑文」を用いて、トロイア戦争の年代とその継続期間の推定を下している段が中心となっている。アイスキュロスの名が記されているのは、その悲劇作品『アガメムノーン』の一節に附して、スタンレー自身の研究が披露されているからであって、アイスキュロスがヤコブス・ホイエルの関心を占めていたからではない。(なお後日明らかになった一点を附記しておきたい。ヤコブス・ホイエルの中心的興味は「アルンデルの大理石碑文」に刻まれた年代記にあった。これは今は「パロス島大理石碑文」として知られる有名な年代記資料の前身であるが、初版 (1628 ～ 29) は、高名なる英国の学者 J. セルデンの校訂によって出版された。後日発見されたヤコブス・ホイエルの蔵書目録 (下記 (II) 参照) の中には、セルデンの初版は見出せないが、J. プリドーの改訂新版 (1676) が含まれており、この大理石碑文にに寄せられていたヤコブス・ホイエルの興味と関心がスタンレーの注記のみに留まるものでなかったことが察知される。)

同じように、I. フォシウスの校訂・注釈の『カトゥルス詩集』(1684) のばあいも、これにヤコブス・ホイエルが言及する場合、カトゥルスの詩そのものは殆ど完全に関心の対象とはならず、校訂・注釈家フォシウスの研究や知見からの引用が、ホメロス本の欄外余白を埋めている。例えば、『イリアス』1. 423 行で「ゼウス神は大海原の方へ、<u>咎めなき</u>アイティオペスらのもとへと去っていく」、というくだりがある。しかし<u>咎めなき</u>という読み以外に、<u>メムノンとゆかりの</u>アイティオペスとい

う読みを伝える古い写本がある。“ローマの詩人カトゥルスは後者の読みを伝えるホメロス写本を使用していたかもしれない”という見解を注釈者フォシウスは述べており、そのフォシウスの見解をヤコブス・ホイエルは引いているのである。紀元前一世紀中葉、カトゥルスの時代のホメロス本は、今日ごく微細な断片状のものしか伝存せず、フォシウスの解釈の当否を最終的に決定する手段はない。しかしその蓋然性も否定されえず、今日使用されているO.C.T.版本にも、メムノンとゆかりのという読みは、欄外に“旧写本読み”として記録されている。これを見ると、330年前のヤコブス・ホイエルの当該欄外注は、悠々今日までなお有効、と言うことができる。

同じくI.フォシウスの『ポンポニウス・メラ注釈』を引く、ヤコブス・ホイエルの『オデュッセイア』4. 354～59の欄外書き込みは比較的簡略である。しかし‘見よ’と指示されている『ポンポニウス・メラ注釈』、第2巻第7章を見ると、驚くべきホメロス批判論が展開されていることがわかる。『オデュッセイア』4. 354～59という箇所には、“エジプトの沖合にファロスという島があり、強い風が後ろから帆に吹き込む時に、まる一日の船旅で辿りつく”という有名な記述がある。ヤコブス・ホイエルは、その欄外余白に“ここでエジプトというのは、ナイル河口の町ペルシアクムであると、(フォシウスは)解している”と記し、上記フォシウスの注釈書の巻・章を記している。指示の通りフォシウスの著述を開いてみると、ホメロスの詩句の正しい理解には至らぬままに安易な盲信に陥り、合理性を無視することも嫌わぬ“ホメロス教信者”どもに対する、容赦ない攻撃文を発見する。

素直にホメロスの言葉を理解すれば、ファロスまで強風時に一昼夜の航程といえば、ナイルの三角州の東端に位置するペルシアクム以外の場所はない。ところが、盲信者どもは昔ナイルの河口はメンフィスの辺にあったが二千年も時が経つうちに、ナイルの運ぶ土砂が海岸線を北に押し出した、という。その為に、ファロス島はアレクサンドリアの目と鼻の距離に近づいたのだ、と言っている。これは全くのナンセンスだ、とフォシウスは批判攻撃しているのである。今は古典研究史の彼方にかすんで見えるこの論争であるが、これに寄せられた当時の学者たちの熱い関心は、このフォシウスの注釈を眼のあたりにすることによって、はじめて甦る。またここにヤコブス・ホイエルの地誌・地理学的興味の由縁を辿り直すことも可能となる。

ブリンク文庫の蔵書と、ヤコブス・ホイエルのホメロス欄外注記との交錯点の幾つかは以上の数例からある程度、具体的に示されたと思うが、最後にもう一例だけ説明しておきたい。C.サルマシウス校訂・注釈『博学者ソリヌス』(初版1629. 再版1689.)である。この大著については、ただ単にヤコブス・ホイエルとの関連について論ずることは当を失することになろう。何故ならば、サルマシウスは初期吟誦詩人たちやその口誦叙事詩群と、今日伝承されているホメロス叙事詩『イリアス』『オデュッセイア』との間に違いがあったことを指摘する。この問題はヤコブス・ホイエルよりも100年後、18世紀末になってはじめてドイツの古典学者F. A.ヴォルフが正面きって取り上げるところとなり、サルマシウスの論点は、ヴォルフ以降のいわゆる『ホメロス問題』の嚆矢となった観があるからである。サルマシウスからヴォルフまでの約170年ばかりの丁度中間点のあたりに、ヤコブス・ホイエルのホメロ

ス欄外注記が位置する事に注意を払いつつ、サルマシウスからヤコブス・ホイエルが何を読みとっているか、簡単に見て行くことにしたい。

ソリヌスは西暦 200 年頃の学者で、今日の刊本では 200 頁足らずの『世界地理』の編者である。また“地中海”という呼称を初めてつかった人としても知られている。かれが草した当時の『世界地理』は、リウィウスの大著『博物誌』と上にも挙げたポンポニウス・メラの『地誌』に関する部分を抜萃・要約した小冊である。小冊である故に、古代末期から大航海時代が到来するまでの約 1500 年間、ラテン語世界の各地に写本が伝わり広く読まれたことが知られている。サルマシウスの『ソリヌス』(1629) は、この小冊の『世界地理』に対して、今日の版にすれば、3000 ～ 4000 頁もの紙幅を要するほどの注釈を施したものである。『世界地理』の注釈という範囲をはるかに越えて、古今の人間世界に於いて生じた全ての事象を、地図という平面の上に展開して見せた。大部な百科辞書にも相当する凡百の知識を地図面の解説として盛り込んでいるのである。

ヤコブス・ホイエルはサルマシウスのこの『世界地理』注釈を、正に一つの辞書として、ホメロス詩中に現れる様々の稀語の解釈に役立てている。例えば、ギリシア語・ラテン語における「栗毛色」などの色彩語彙の解説などである。また地名、部族名やその伝説的背景をさぐる百科辞書としても使っている。例えば『イリアス』2. 852 に現れるエネトイ人の出自や、それが後世アドリア海北端に住みついたウェネトイ人の祖かどうか、又、ウェネティアという地名もこの一族に由来するものかどうかの説明も、サルマシウスの注釈に求めている。さらにサルマシウスの著述は、凡百の道具の説明にも及ぶ。二頭立ての馬車の構造と、これを牽引する左右両側の馬の性格や優劣までも詳述し、その記述どおりに、ヤコブス・ホイエルは『イリアス』23. 338 行目の馬車競技の描写に注を施している。『オデュッセイア』に於いても、同じようにサルマシウスの百科辞書的知識が活用されている。特筆すべきは『オデュッセイア』21. 47 ～ 49 において、ペネロペーが手にする鍵と錠前との構造解説である。サルマシウスの微に入り細をうがつ解説も大したものであるが、これを正確に要約してホメロス本の欄外余白に記載しているヤコブス・ホイエルの力にも敬意を表せざるを得ない。

このように多種の文献と、ヤコブス・ホイエルのホメロス注記との重層的な交錯が可能となっているその背景には、かれの少年期より培われた学習システムが作用していたのではないかと思われる。後日判明したことであるが (後段 25 ページ参照)、かれが 10 才代後半に記した自筆の講義ノート数冊の各巻巻末には、かれ自身が作成した綿密な用語索引が附記されている。これら少年時代の訓練の跡をもとに類推をたくましくすれば、かれはアルド版ホメロスを基準として自作の用語索引をあらかじめ準備しており、それを常時、脳裏に甦らせながら、百種に及ぶ文献を次々と渉猟していったものと思われる。かれの非凡なる記憶力については、後段 28 ～ 29 ページにゆずりたい。

しかし他面、300 余年後の今日の視点からみれば、ヤコブス・ホイエルの欄外注記の及び得なかった事項を指摘することも容易である。例えば、上にも記した「エネトイ — ウェネティ — ウェネティア」に関わるサルマシウスの解説の中では、次の事柄にふれる一節がある。ギリシア語では語頭が母音ではじまる単語の幾つかの

ものを、これと同意・同義と目されるラテン語の単語と比較してみる。するとラテン語単語の語頭母音のさらに前に V- 音が記されていることが多い、という指摘がある。この綴字上の違いは、古くはギリシア語の場合にも語頭に V- 音を冠する単語があったけれども、早く、とくにイオニア地方のギリシア語ではこの音が消滅し、語頭には母音だけが残った為である、というのが今日では定説となっている。この消滅した古い音素 (ディガンマ) とその名称に関する説明は、古くローマ帝政初期から知られており、ハリカルナッソスの学者ディオニュシオスの、『ローマ古代史』第 1 巻 20 節にも記されている。ヤコブス・ホイエルは、この歴史書にも通じていて、幾度かホメロス注記において引用している。従ってこの音素 (ディガンマ) が古期ギリシア語において存在していたことは、かれにとっても熟知の事実であったのに違いないのであるが、その音素が果して、ギリシア語最古の記念碑ともいうべき、ホメロス叙事詩において、その痕跡をとどめているかどうかという重大な問題点には思い至らなかったのではないか。たとえそれを察知していたとしても、その音素を *F* という字で明示して、ホメロス叙事詩の幾つかの単語の語頭に附記するという暴挙には、とうてい至らなかっただろう。第 2 章において詳記する、ヤコブス・ホイエルの訂正、補正の痕跡から判断する限り、ディガンマ (= *F*) の介在を念頭にすることはなかったと判断してよい。

古代ギリシアの都市や村落についてヤコブス・ホイエルは『ストラボン』、『ポンポニウス・メラ』、『パウサニアス』、『ソリヌス』などの、地理・地誌関係の資料を、博捜している。それら地誌家の記述が及ばない、当代事情の記述、例えば、かつての古代都市の名残りをとどめる町や村の、17 世紀における人口や住居の規模についての証言を、リコーの『トルコ帝国史』やスポーンの『地中海東部諸地紀行』に求めている。ホメロスの世界を、17 世紀の地中海地図の上に投影し、その実在性を確かめようとする意欲が強くうかがわれる。この点に限ってみれば、ヤコブス・ホイエルは、かれより約 100 年後、ホメロス叙事詩を片手に、ホメロスの故里やその叙事詩が伝えるギリシア諸地の実情を見極めようと旅立った、ロバート・ウッドの心情的先駆けであったと言えるかもしれない。

ウッドの『詩人ホメロスの独創的天才を訪ねて』(1776) の一節とヤコブス・ホイエルのホメロス欄外注記とを比較してみよう。ウッドは『オデュッセイア』15. 403 ～ 4 について次のように述べる。これは主人公の留守を守る豚飼いのエウマイオスが、自分の故郷シュリエーについて語る一節である。「その島こそが太陽の曲がる道 (トロパイ)、オルテュギエーの北の方」。ウッドは、太陽の曲がる道とは “冬至の回帰点であり、ホメロスの故郷キオスの小高い山頂から、冬至の陽が沈む方を眺めれば、そこにはシュロス島の山影が眼に映る。これは単なる類推ではあるが、シュリエーとはシュロスのことであり、ホメロスは故郷の夕陽の眺望を語っているのではないだろうか、” と書いている (同書、16 頁)。ウッドの臨場感みなぎる着想を素直に諒とする現代の学者はいない。しかしギリシアの太陽と島影の中に、ホメロス叙事詩を置いて考えてみたいという願いは今日も根強く残っているせいか、ウッドの解釈は立証されないままに語り伝えられている。これに比べて、ヤコブスの欄外注記はどうか。かれは『オデュッセイア』15. 403 行の「シュリエー」の下に、二本の細いアンダーラインを引いている。しかしそれに関する特段の注記は一語も

記入していない。後日何か自分の調査と考案の結果を記入する為の目印としたのであろう。彼がウッドのようにホメロスを片手にギリシアまで出かけていったという証拠は見つかっていない。でももしその機会があたえられていたならば、必ずやウッドのようにかれもエーゲ海の諸地を歴訪していたに違いない。

ヤコブス・ホイエルの欄外注記の中には、僅かではあるが、その後百年のホメロス研究の道筋を予告するかのような明白な痕跡が含まれている。年代学、碑文学、言語学、地理・地誌学などは、いずれも客観的資料をもとに、ホメロス叙事詩が伝える往古の世界を解き明かす学問的方法として、18 世紀以降今日に至るまで、ホメロス研究を拓いてきたものである。17 世紀末、正確には 1685 年頃から 1689 年までにヤコブス・ホイエルが、アルド版ホメロスの欄外に記入した諸種の注記の間には、間もなく生まれ出ずるべきホメロス学の曙光がさしている。しかし、以上幾つかの例によって説明したように、それらはあくまでも一条の曙光であり、学問の行方のすみずみまでを明るく照らすほどの決定的な力には欠けている。何よりも残念に思われるのは、かれの注記は 1689 年で途絶えており、かれが意図した完結点には至っていないことである。

(II) 以上は、ヤコブス・ホイエルの欄外注記と、ブリンク教授の 16 ～ 18 世紀コレクションの中にあるいくつかの交錯点を拾い、そこに窺見されるヤコブス・ホイエルの関心の所在を辿ったものである。この両者間の照合と確認が決定的になる為には、さらに第三の資料が必要であった。それが、ロンドンの大英図書館所蔵の、『ヤコブス・ホイエル博士蔵書目録』と題された小冊子である (S.C.(803).2)。ヤコブス・ホイエルは 1689 年に死没しているが、死後 16 年間、その蔵書は母ゲルトルーダの死 (1705) まで、ユトレヒトのヨハネス教会と公園をはさんで向いするその旧邸の書斎におさめられていた。母の死後、ホイエル家の家具、什器、絵画、鏡面など全てが競売に附されたが、「書籍、肉筆写本類」はその中の第 13 番目のグループにまとめられて、1706 年 5 月 3 日、故人の旧宅において競売に附された。その為の蔵書目録がユトレヒトの出版者ファン・デ・ワーテルによって整えられ、希望者に配布された。その一冊、30 頁ばかりの刷物が、大英図書館に保存されていることを、筆者に教えてくれたのは、ケンブリッジ大学のディッグル教授であった。

目録の書目は 3 項目に大別され、(A) 法律関係 (149 書目)、(B) ギリシア語刊本 (169 書目)、ギリシア語肉筆写本 (14 書目)、(C) 雑書目 (ラテン語、英語、仏語、西語、伊語、蘭語)(474 書目) に分類されている。

ヤコブス・ホイエルは、1672 年ユトレヒト大学の A. マタイウス教授の下で、法律学の学位を取得しており、ローマ法の専門家としての訓練をうけていた。ユトレヒト大学図書館にはかれの筆写による、マタイウス教授の『パンデクタエ (ユスティニウス法典) 講義録』が残っている。約 1500 頁の紙片を綴じた部厚いノートはまさしくヤコブス・ホイエルの筆跡であり、随所に挿入されたインターリーフの補注も、巻末に附けられた綿密な事項・語彙の索引も、かれの筆になるものであることが判る。かれの学位論文は「姦通罪に関するユリウス法」を論ずるものであったとする公式記録は残っているが、論文そのものは見附かっていない。かれが advocatus として、どのような活動を遂げたのか、それを証拠づける記録もまだ実見するには至っていないが、かれの蔵書目録の (A) 項目は、専門研究者の識眼を借

りることが出来るならば、そこからヤコブス・ホイエルの法曹家としての輪郭を浮かび上がらせることも出来るのではないかと思われる。『パンデクタエ』に関する、諸々の法曹学者たちの注釈や見解をまとめた書目が散見されることからも、当時オランダ諸邦に共通の法的基礎はローマ法であったことが窺われる。しかし、箇々の州やその法廷では、多様な慣習、先例、判例、また高名な法学者の意見や論文が、法の具体的運用に際しては、法に準ずるべきものとして実際に援用されていたのであろう。その種の書目も多数含まれている。150 冊の書名からだけでは、詳しい内実を知ることは専門外の人間には不可能である。けれども、何時の日か、17 世紀オランダ諸邦の法曹事情に詳しい専門家からの教えを仰ぎ、ヤコブス・ホイエルの法曹家としての姿を、その輪郭だけでも捉えてみたいと願っている。

目録の項目 (B) は 1500 年以降 1600 年代末までに刊行された古代ギリシア語文献の代表的なものをほぼ全て含んでいる。ホメロス、アイスキュロス、ピンダロス、カリマコスの四詩人の版本は異なる校訂になるものが複数集められている。目録の記載によれば、“故人の肉筆注記多数あり”という但書がついているのも、この四人各々の作品集である。それら以外には、版本は一種のみであるが同じように故人の注記多しの記載をもつ『アリストファネス喜劇集』と『ルキアヌス作品集』がある。この (B) 項目の 183 の書目のうち、現在、実物の所在が知られているのは、1517 年アルド刊『ホメロス全集』、1607 年ビセトゥス校訂ジェネバ刊『アリストファネス喜劇集』、そしてヤコブス・ホイエル肉筆書写の『ギリシア語語源辞典』の三点のみであるが、探索の進行次第でその数は増加する可能性はある。

ヤコブス・ホイエルがホメロス注記で引用している文献は殆ど全部この (B) および下記の (C) に含まれており、それらはみなかれの書斎の棚に並んでいたことが判る。しかしかれが頻繁に引用しているにもかかわらず、かれの蔵書目録の中に見当らないものが二点ある。

(a) エウスタティオスの『ホメロス注釈』4 巻。これは 1542 ～ 50 年の間、継続的にローマで刊行され、マヨラーヌスとデヴァリウスという二人の学者がその校訂と索引作成に当っている。ヤコブス・ホイエルは、『イリアス』の注記に 2 回、『オデュッセイア』の注記には 6 回これを用いているが、かれの蔵書目録中にエウスタティオスは含まれていない。

(b) ホメロス欄外注記の中で、ヤコブス・ホイエルが、‘sch. mss.’ という略号を用いて、『イリアス』注記中だけでも、128 回にも及ぶ頻度で引用している文献がある。この略号は “肉筆古注” (scholia manuscripta) を表し、後段第 2 章で詳述する通り、現在ライデン大学写本室に於て「フォシウス旧蔵ギリシア語写本 64」として保存されている、『イリアス』写本の欄外注記である。1689 年その旧所有者のフォシウスが死去するまで —即ちヤコブス・ホイエルの生存時期には—この写本は英国ウィンザーのフォシウスの書斎にあり、これを閲読する為にヤコブス・ホイエルはウィンザーを訪ねてフォシウスのもとに留ることがあったに違いない。上記 (a) においてヤコブス・ホイエルは二度だけ『イリアス』注記にエウスタティオスを引いている旨を記したが、それは『イリアス』最終巻の初めの処で、ちょうどそれはライデン写本が欠落している部分に該当している。注記に際してライデン写本の古注を使うことが出来なかったので、エウスタティオスを使ったのかとも思われる。ライデン

写本は『イリアス』本文及び注記のみを記載しており、『オデュッセイア』を伝えていない。

他方、蔵書目録に記載されているホメロス関係の書目で、ヤコブス・ホイエルの欄外注記には一度も言及されていないものもある。書名だけ挙げておきたい。

(i) L(iber). G(raecus). Dd(Duodecimo) et M(inore). Nr. 15 et 20. Homeri Ilias et Odyssea. cum notis manuscriptis viri docti (ギリシア語刊本、小版、ホメロス『イリアス』『オデュッセイア』、故人の肉筆書込みあり).

(ii) L. G. O(ctavo). Nr. 87. Scholia in Homerum. Straetsb. 1527 (ギリシア語刊本、オクタヴォ版、『ホメロス古注』、ストラスブルク版 1527 刊).

(iii) L. G. O. Nr. 75. Didymi Scholia in Odysseam Homeri. Graece. Aldus 1528 (ギリシア語刊本、ディデュモス著、ホメロス『オデュッセイア』古注、全文ギリシア語、アルドゥス 1528 年刊). これは恐らく Adams Nr. 443 と同一の版。もしそうであったなら、その中にポルフュリオスの『ホメロスに関わる諸問答』も含まれていた。ポルフュリオスの同著からの引用は、ヤコブス・ホイエルのホメロス欄外注記の中で 11 カ所に於いて認められる。

(iv) M(anu). S(criptus). F(olio). Nr. 7. Emanueli Moschopuli Technologia in Homeri Librum Primum et Secundum (肉筆写本、フォリオ版、エマニュエル・モスコプロス著『ホメロス第一巻及び第二巻に関する技巧的考察』).

(v) L. G. O. Nr. 70. Clavis Homerica (ギリシア語刊本、オクタヴォ版『ホメロスを解く鍵』その性質と用途は、初心者向けのもの、ギリシア語本文の行間に、各ギリシア語単語に対応するラテン語訳語が mot à mot に印刷されている。(詳しくは、G. Finsler, Homer. Von Dante Bis Goethe, 1912, 1973 Hildesheim. pp. 150 ～ 151 参照).

(vi) M. S. Q(uarto). Nr. 14. In Homero Vossiano Ilias A (ギリシア語肉筆写本、「フォシウス所有のホメロス本における『イリアス』第一巻」、詳細は不明であるが、これはライデンのフォシウス旧蔵の『イリアス』写本の第一巻の本文を、ヤコブス・ホイエル自身が書写したものであった可能性が大である).

上記 (i) ～ (vi) の中、(iv) と (vi) は肉筆写本であり、(A)、(B)、(C) の大分類中の (B) に附随する 14 書目中に属している。これら 2 書目以外に、(B) に記載の写本中、現在所在が確認されているものは、次の一点で、ユトレヒト大学図書館写本室に収蔵されている。

L. G. Ms. in Folio. Nr. 7. Etymologicum Graecum Patr. Societatis Jesu Antverpiae, Nitidissime scriptum, 3 vol. (ギリシア語肉筆写本、フォリオ版、『ギリシア語語源辞典』3 巻 (アントワープ、イエズス会所有の原本の写し)、ユトレヒト大学図書館 Ms. 9 (I.A.4-6)).

このヤコブス・ホイエル自筆の写本について、1711 年にユトレヒトを訪ねたツァハリアス・フォン・ウッフェンバッハは、次のような報告を残している。かれは、ドイツのフランクフルト・アム・マインに住む、愛書家であり、中世写本の蒐集家としても知られた人物である。当時ユトレヒト大学のオリエント語学の教授であったアドリアン・リーラント (1667 ～ 1718) の案内のもとに図書館を見学した機のことである。“その後随分苦労して、遂に他のどの収蔵書にも増して是非とも見たいと

願っていた二種の最も貴重な書物を発見することが出来た。一つは『Etymologicum Graecum』のみごとな写本で、これについて、リーラント教授は大そう誇らしく思っているようだった。かれの説明によれば、ある時、グレーヴィウス教授 (J. G. Graevius, 1632 ～ 1703) がその原写本をアントワープのイエズス会から期限 3 週間という条件の下に借り出した。そしてこの短時日の中に――これを聞いたときの私の驚きは、言葉にもならなかったが――デ・ホイエルという名の、ユトレヒトのとある弁護士が、その筆写を完成した、というのである。その成果は、各巻とも指三本重ねたほどの部厚さのフォリオ版写本三巻からなるが、ただ細密な書写というにとどまらず、極めて美麗な書体で書かれていた。このデ・ホイエルという人物は、自分自身のためにも、別の一式を書写した。この自分用の写しは、かのホイエルの死後その蔵書が競売に附された際、これが汚穢されることを危惧した P. ブルマン氏 (1668 ～ 1741) の仲介によって、ユトレヒト市当局が買上げて、大学図書館に寄贈する運びとなった、という。のちに、リーラント、キュスター (おそらく L. Kyster, 1670 ～ 1716) の両氏は、この写本と他の諸辞典との文言校合を試みたが、この写本と、かの有名な『大語源辞典』(Etymologicum Magnum) との間には、部分的に類似点は認められるものの、両者は全くの別種であるとの結論に達した、という。以上の話の信憑性については、リーラント教授のみならず、図書館長自身も保証してくれた。このデ・ホイエルという人は学問の造詣深く、卓越したギリシア語学者であったという。その後で、図書館長は私たちに一巻の『アリストファネス』の刊本を見せてくれたが、この本にも随所にデ・ホイエルが書き込んだ、綿密な、ときには冗長な注記があるのを実見した。この書物は 1607 年カルダリーナ協会発行のジェネヴァ版『アリストファネス』であった。" (『低ザクセン、ホラント、及び英国にまたがる特記すべき旅行談義』Merkwürdige Reisen durch Niedersachsen, Holland und England. 3 巻 1753 ～ 54、ウルム刊、以上はその第 3 巻 711 ～ 717 頁からの引用試訳)。

ヤコブス・ホイエル筆写の 3 巻の辞書を目前にしてフォン・ウッフェンバッハは驚嘆している。しかし今日それを前にしたときわれわれが感ずる驚きよりも大きかったとは思われない。ウッフェンバッハは驚きのあまりか、その話には多少混乱がある。事実は、ヤコブス・ホイエルは、部厚い辞書の写しを二部作った。一部はグレーヴィウス教授の為に 3 週間で写しとり、後日それをもとにもう一部自分用に写しを作製した。大学図書館に寄贈され、ウッフェンバッハが閲覧し、また今日われわれが実見できるのは、3 週間で写しとった最初の写しではなく、ヤコブス・ホイエルが後日、改めて、自分自身の為に作製した第 2 の写本である。第 2 の写本の為にかれが、どれだけの時間を費したか、それは実は不明である。ちなみに、18 世紀終り頃、英国の大学者 R. ポーソンは、フリュニコスの辞書一冊 (『Etym. Gr.』の 1/3 ほどの) を書写する為に 6 ヶ月を費したと伝えられている。

しかしそれにしても、ヤコブス・ホイエルは、その第 1 の写本作業をどういう方法によって僅か 3 週間の時間で完了し得たのか。それが可能であったのは、かれがこの辞書を文字通りアルファからオメガまで完全に暗記していたから、と考えるほかはない。かれは原本を一字づつ眼で追いながら写しとったのではなく、自分の記憶の正しさを原本によってチェックしながら、ひたすらペンを走らせ続けたに違い

ない。3週間でこの写本作業を完成するには、それが絶対の条件のように思われてならない。とすれば、それまで原本はアントワープのイエズス会に保存されていたのであるから、ヤコブス・ホイエルは、幼少の時代にアントワープまでおもむき、そこでギリシア語の習熟期間を過ごし、大冊の辞書三巻を諳ずるに至っていたと考えねばならない。

また同じ時にウッフェンバッハが見せて貰ったという、ヤコブス・ホイエルの欄外注記入りの『アリストファネス』一巻は、今日ユトレヒト大学写本室に保存されている (UBU. ABHSS. MS. 1496 (I.A.21))。これについての調査はまだ終っていない。

ウッフェンバッハの旅行記の一節には、図書館長、案内役を勤めたアドリアン・リーラントや、ヤコブス・ホイエルの蔵書競売の現場にいて、かれの肉筆写本がユトレヒト市に買上げられるように仲立ちをしたピーター・ブルマン、ユトレヒト大学のグレーヴィウス教授、などの名が登場するが、かれらの名前は、ヤコブス・ホイエルの葬儀の列席者名簿にも記載されており、生前より故人と親密な間柄であったと思われる。グレーヴィウス教授の、「スエトニウス」、「フロルス」、「テレンチウス」などの講義に列した際の、ヤコブス・ホイエルの綿密な講義筆録は、今日もユトレヒト大学図書館に保存されている。その子テオドル・グレーヴィウスも葬儀参列者の一人である。リーラントはヤコブスより15才年下、ブルマンは17才年下であった。リーラントは旧約聖書学者として、ブルマンは古典学者として後世にまで知られている碩学たちである。またリーラントと協力して両『語源辞典』の文言校合を試みたというL. キュスターは、ヤコブス・ホイエル没後にユトレヒトに学んだドイツ人古典学者である。かれが1696年に発表した論文「Historia Critica Homeri」(「ホメロスに関する批判的史実」)、1705年の『スイダス辞典』校訂・注釈、ならびに1710年の『アリストファネス』注釈・校訂などは、後世の古典学史上有名な著作である。しかしホメロス、アリストファネス両詩人については、すでにヤコブス・ホイエルが1689年以前に、厖大な参考資料を集め、それを両詩人作品集の欄外注記の形で残しているし、少くとも『アリストファネス』の場合、ヤコブス自筆注記を記載したジェネヴァ版は、大学図書館に残されていた。L. キュスターはヤコブス筆写の『語源辞典』の文面を精査した人である。同じようにかれはヤコブスの『ホメロス』本と『アリストファネス』本の注記類をも眼を皿のようにして熟読検証していたのではないか。この点については、今後の調査によって是非とも明確な結論を得たいと思う。

ともあれ、ウッフェンバッハの旅行記の一節は、卓越したギリシア学者ヤコブス・ホイエルの思い出が、かれをなつかしむ年下の友人たちの間で没後20年余の後、1711年頃まで語り継がれていたこと、そしてその思い出が外国からの訪問者にまで披露されることがあった有様をよく伝えている。

かれの蔵書目録の中に見出される次の写本二点も、かれのギリシア学の驚くべき実体を告げるものではないかと思われる。

(i) L. G. Ms. F. Nr. 6. Anthologia ex Bibliotheca Vaticana (ギリシア語写本、フォリオ版、ヴァティカン図書館に原本所在の『ギリシア詞華集』より).

(ii) L. G. Ms. F. Nr. 8. Anthologia ex Bibliotheca Palatina (ギリシア語写本、

フォリオ版、パラティナ図書館に原本所在の『ギリシア詞華集』より).
(i)、(ii) 両写本のいずれも、残念ながら、今日なお失なわれずに存在しているのかどうか、いずれの所在も、全く不明である。『ギリシア詞華集』は、1607 年頃サルマシウスがハイデルベルク大学図書館において発見したものであるが、版本として世に広められることなく、原写本は 1623 年ローマに持ち去られ 1797 年まで人の眼に触れることもなくヴァティカン図書館に収められていた、と言う。ところがヤコブスの蔵書目録の題名から想像すると、『詞華集』原本がハイデルベルクの「パラティナ」図書館に収蔵されていたときに作製された写しと、それとは別に、原本がヴァティカンに移された後に、ローマで作製された写本一巻と、計二巻の写本が、ヤコブス・ホイエルの書斎に収まっていたとの印象をうける。何時、誰が写しを作り、どのようにしてそれぞれがかれの書斎に届けられたのか、全く不明であり謎である。ユトレヒトは宗教改革後もヴァティカンとは特別の関係にあったと言われており、人を介して写本を手に入れることも可能であったかも知れない。或いはヤコブス・ホイエル自身、ヴァティカンを訪ねて写しを作製することも出来たのかも知れない。何時の日か、両写本の片方でも所在が明らかになれば、この謎も氷解することになるだろう。

ヤコブス・ホイエルの蔵書目録の分類 (C) 雑書 474 書目の中、その半数以上のものは古典ラテン語文献の校訂・注釈・研究に関わるものであり、'雑書' という分類は、必らずしも内容を正確に表示するものではない。先に簡単に触れたサルマシウスの大著『ソリヌス研究』(1629) や『同名異種薬草論』(1689)、フォシウスの『ポンポニウス・メラ注釈』(1658) や、同『カトゥルス研究』なども、かれの雑書中に含まれていたことがわかる。また近世のラテン語著述家の諸作の中では、エラスムスの『対話集』(Colloquia, 1635 Elzevier 版) や、同『手紙作法』(年代・版 不詳)、エラスムス『生涯と書簡集』(1607 ライデン版) や、グロチウスの『詩集』(年代・版 不詳) や『書簡集』(1687 アムステルダム版)、デカルトの『プリンキピア・フィロソフィカ』(1664 アムステルダム版) などをはじめ、多数の 17 世紀欧州各国の碩学たちの著した代表的な書名が含まれている。

"雑書" という未整理の分類は、ヤコブス・ホイエルの学問的興味があまりにも多岐にわたり、法学、ギリシア学以外には、細分が短時間の中には困難であった為かも知れない。假りにその他の "人文学" とでも称すべき大項目を設けて細分を試みるならば、古代ラテン文学以外のかれの蔵書集成は次のような展望を見せている。

(a) 碑文学、古代貨幣学、紋章学など、近世考古学の前史を形作るもので、代表的一作を挙げるならば、E. スパンハイムの『古代貨幣の秀逸性と効用について』(1664 年 ローマ刊) で、これはホメロス欄外注記にも引用されている。ホメロスやナウシカの肖像も、古代貨幣の刻印を参考にしているのである。

(b) キリスト教学に属すると目される約 50 の書目中には、アウグスティヌス『神の国』(年代不詳)、トマス・アキナス『キリストのまねび』にはじまり、ギリシア語新約聖書 (恐らく 1549 アルド版)、カルヴィンの『Institutiones』(恐らくラテン語版 1534 年)、反宗教改革派の雄とされる C. バロニオの『教会史』(1617 ケルン版)、さらにカルヴィン派のオランダにおける諸流に属する作者たちの著作が網羅されており、ここにはユトレヒトを中心とする複雑な新旧両派の思潮が映しださ

れている。これらの書目がホメロス欄外注記に引用されることは皆無に近く、唯一回『殉教者ユスティヌス』(1551 パリ版) からの一節が引かれているに過ぎない。

(c) 欧州各国歴史関係書目の中で、最大部分はオランダ各州の歴史書である。報告者は 50 書目以上にのぼる文献をここに紹介する専門知識を全く欠いており、何時の日か識者の助けを借りて、ヤコブス・ホイエルの歴史的知見の輪郭なりを明らかにしたいと願っている。ただ、オランダの歴史は、古代ローマに端を発する頃より、同一系統の民族が複数の異なる統治組織の下に分れ、原初的連邦制の下に近世に至るまで推移しており、その間、幾度も近隣のスペイン、フランスなどの大国から干渉をうけてきた。ヤコブスの蔵書の書目からも、その凡その歴史的変遷を窺うことができる。イタリア、スペイン、フランスの歴史書が多く散見されるのは当然としても、その中に混って、ヴェネチア共和国と、ヘルウェティア (スイス) 連邦史などが、かなりの部分含まれていることが注意を引く。やはり連邦共和国であったオランダ史との共通点などに関心を寄せていたことが窺われる。ヤコブス・ホイエルの眼が南欧にむけられているのは、当時のオランダの文化的風潮が然らしめたものか、あるいはかれの場合、ギリシア、ローマ学との関わりからそうなっているのか、いずれかであろう。海峡を隔てた隣国イギリスの場合には、ブキャナンの『スコットランド史』(年代不詳)、キャムデンの『英国年代史』(年代不詳) などの数書目を数えるにすぎない。

(d) 歴史関係の書目にみられる南方重視の傾向は、ヤコブス・ホイエルが所有していた文学書に於いても認められる。50 書目以上にのぼる文学関係のものの中、大多数はペトラルカ以降のイタリア文学作品であり、その間に 16、17 世紀のスペイン、フランスの有名作者の作品が散見される。ここでも英国文学の作品は絶無に近い。シェイクスピアもミルトンも見当らず、辛うじてホッブスの『レヴァイアサン』(1651) が只一巻含まれている。

(e) 16、17 世紀はオランダの海外雄飛の最盛期であり、時代の風潮はヤコブス・ホイエルの蔵書の一部にもよく反映されている。25 ほどの書目には、マルコ・ポーロの『航海記』(イタリア語、フォリオ版、刊行年不詳) に続いて、デ・ラート『西インド紀行』(1625 ライデン刊、フォリオ版)、同『アメリカ原住民諸部族の起源について。グロティウス説に対する反論』(年代不詳) などのアメリカ大陸関係のもの、さらにショウテン『東インド海航海記』(1676)、ダッパー『中国への使節』(1665 アムステルダム、フォリオ版)、同『中国への第 2 回、第 3 回の使節』(1670 アムステルダム、フォリオ版)、同『アフリカ論』(1680 フォリオ版) などである。これだけを見ても、オランダ東インド会社の最盛期に、ヤコブス・ホイエルは生きていたことが判る。かれのホメロス欄外注記の中には、スポーンの『イタリア、ダルマティア、ギリシア、レヴァント旅行記』(1679 アムステルダム) やリコーの『トルコ帝国史』(1670 パリ) など、東地中海の旅行記録からの引用がしばしば見られる。当時の広凡な旅行記資料に広い関心を持っていたから、ホメロス世界の把握に際してもスポーンやリコーの旅行記に注意を怠らなかったのであろう。

(f) その他諸般の学問の中でも、植物学、金属 (鉱山) 学、地図 (測量) 学、動物学 (鳥類学)、医学など、当時新進の自然科学 (博物学) の諸分野にも、かれの関心がむけられていたことは、幾冊かの蔵書から察知される。しかし (a) 〜 (e) の書目にみられ

るような、集中的な傾向は認められない。他方、近代欧州諸地の言語の習得の為に用いられた、辞書・文法書や会話習熟の為の語学書が目立っている。ラテン語とフランス語の習得は恐らく幼少時から始められていたらしく、語学書レベルの書目は見当らない。ヤコブス・ホイエルの語学書目20余冊は、イタリア語、スペイン語、ヘブライ語に集中している。しかもそれらは皆、仏・伊、伊・西、西・仏であって、オランダ語を介した学習書はない。英語辞典一冊も、英語・ラテン語辞典である。またヤコブス・ホイエルは1676年頃、英国旅行記に附して自筆の'英語文法要領'を草しているが、これも全文ラテン語で記述したものである。

また、現代欧州語の実践的読解資料として集めたものであろうか、かれは当時の諸国語に翻訳された新約聖書の殆んど全てではないかと思われるほど多数の俗語訳聖書を蔵書中に所有していた。しかし、ヤコブス・ホイエルは単なるPolyglottaでなく、古代ギリシア語に関する限り、当時第一級の識見を有したことは既に述べたところである。それのみか、やがて展開する比較言語学に対しても関心を寄せていた。そのことは、ホメロス欄外注記の中で、メリック・カソボンの『四種の言語に関する注釈』の第2部(1650年 ロンドン刊)に含まれている「サクソン語」の一節を引いて、ホメロス叙事中の稀語の解説を試みている点からも充分に想像できるのである。

以上は、かれのホメロス欄外注記と蔵書目録との交錯点とを手がかりとしながら、「ヤコブス・ホイエルは学問の造詣深い人であった」と、アドリアン・リーラントが1711年に洩らした言葉を証明してみた次第である。

[附記] ヤコブス・ホイエルのホメロス欄外注記に使用されている文献一覧表と略号について、具体例を1、2用いて説明させて貰いたい。

Aeschylus, Tragoediae [L.G.Q. 50 c. Schol. Gr. Stephanus 1557; DdM. 22. A. Soph. Eur. Trag. Select. Stephanus; L.G.DdM. 31. A. Trag. W. Canter, Plantin, 1580; L.G.F. 80. A. Trag. c. Sch. Gr. T. Stanley. Lond. 1663 (#264)] Ag. 40 (B 327) .....Cho. 163 (h.Herm. 331) etc..

アイスキュロス悲劇集の場合、ヤコブス・ホイエルの蔵書目録中には同一書名のもとに、[ ]の4種の版本があり[L.G. = ギリシア語版本; Q = クワルト版、F = フォリオ版、O = オクタヴォ版、DdM. = 1/12あるいはそれ以下の小版; 続く番号は蔵書目録内の通し番号; A. = アイスキュロス、Soph. = ソフォクレス、Eur. = エウリピデス; c. Sch. Gr. = ギリシア語古注附き; (#264) = ブリンク文庫中の蔵本通し番号264]; Ag. 40 (B 327)は悲劇「アガメムノーン」40詩行目に附されたスタンレーの注記がホメロス『イリアス』(アルド版 1517年)の第2巻327行目の余白に転写されていることを示す。

例2としてサルマシウスの『ソリヌス』注記をとりあげる。

Salmasius, C. Plinianae Exercitationes in Solinum, Paris, 1629 [L.M.F. 93, 2vol., {Trajecti ad Rhenum 1689 (#269)}], p.846 {= 608 in ed. Traj. Rh.} (Flyleaf I (a)); p.390 {= 219 ～ 20} (Λ 773).....

〃 Exercitationes de Homonymis Hyles Iatricae [L.M.F. 94, ... Traj. ad Rhenum 1689 {bound together with In Solinum in (#269) supra.}] p.100,

b C-F (ϵ 255).

C. サルマシウス『ソリヌス』注釈 [L.M. = 雑書分類; フォリオ版 第93、2巻、1629、パリ版、{但し、検証に使用した版はユトレヒト、1689年版、ブリンク文庫通し番号 269}]、p.846, パリ、1629年刊、846頁 {= 608頁 ユトレヒト版}、(巻頭見開き遊びの第1頁第1項目); 1629年版 390頁 {ユトレヒト版 219～20頁}、『イリアス』第11巻773行余白に引用注記さる、の意。

次にC. サルマシウス [雑書項目、フォリオ 94番、ユトレヒト 1689年刊—これはサルマシウスの一子ルイが父の遺稿中から発見した論文を、1689年はじめてユトレヒトで印刷し、先行の『ソリヌス』注釈 #269と合本して刊行したものである。] その100頁右欄のCからFまでの記述が、『オデュッセイア』第5巻255行目の余白欄外に転写引用されているという意味である。

他の諸項目の記事も上の二例に準じた形式で記載されているが、不整合の点もあろうかと危惧する次第である。宜しく御賢察賜わりたい。なおこの一覧表は、第3回「フィロロギカ」研究集会 (2003年6月6日 於成蹊大学開催) において提出したものをもとに、新たに整理したものである。今日もなお、未確認の書名一点がそのままに残っている (Tabern(?) Itiner. Persica III (『イリアス』第2巻546行注記)。これも将来解決されるべき課題の一つとして、そのまま一覧表中にとどめておくことを許して頂きたい。

INDEX FONTIUM

Aelianus, Variae Historiae [L.G.Q. 69, Roma 1545 (#116); L.G.Q(incert.). Venet. 1552; L.G.O. 65, J. Scheffer. Argent; L.G. DdM(incert.). T. Faber], Lb. xiii. c. 22 (Flyleaf I (d))

Aeschylus, Tragoediae [L.G.Q. 50, c. schol. Gr. Stephanus 1557; DdM. 22, A. Soph. Eur. Trag. Select. Stephanus; L.G.DdM. 31, A. Trag. W. Canter, Plantin. 1580; L.G.F. 80, A. Trag. c. Sch. Gr. T. Stanley, Lond. 1663 (#264)], Ag. 40 (B 327), Ag. 45 (B 759), Ag. 52 (λ 125), Ag. 587 (γ 273-4), Cho. 163 (h.Herm. 331), Pers. 128 (B 87), Sept. 147-8 (Δ 101), Sept. 283 (K 461)

Apollinaris Sidonius, [Sid. Apoll. Opera, J. Sirmondus, Paris 1652 (#247)], Ep. xxiii, V. v. 135 (Flyleaf I (f))

Aristoteles, Rhetorica [L.G.F. 69, Arist. Op. Omn. Gr. Lat. Paris 1654, 2vol.], Γ 3, 1406^{b} 12-13^{c} (Hyp. Od. α)

Arrianus, De Exped. Alex. M. [L.G.O. 54, Arrian. de Exp. Alex. Magni, c. n. Blancardi. Gr. Lat., Amsterd. 1668], I. ii. 5 (B 698), I...(K 460-1, Stanley, Sept. 283), IV. i. 112 (N 6, N 11-2), V. vi. 5 (γ 300), VII. xiv. 8 (T 209-10), VII. xiv. 14 (Ψ 141)

〃 Indike (～Lb VIII. Exp. Al. M.) (κ 239)

Bochart, Samuel, Geographia Sacra, Accesserunt in fine eiusdem auctoris epistolae duae: 1. de quaest. Num Aeneas umquam fuerit in Italia?. 2. 2pt. J. D. Zunneri, Francof. a. M. 1674 (1681^{2}); id. Tit. Hymn. in Apoll. (3) [cf. Od δ 354-57 (18) note by Is. Vossius]. The date of pub. 1674 stands in need of revision, for his work is quoted by Vossius' Pomp. Mela. (first 1658).

Callimachus, Hymni [L.G.Q. 53, Callimach.: Gr. Lat. c. sch. Gr. Stephanus, 1578 c. n. mss. v.d. (cum notis manuscriptis viri docti (ヤコブス・ホイエル自筆の注記ありの意)); L.G.DdM.37. C. et Moschi. Plantin, 1584 (#5); L.G.Q. 71, Call. Annae Fabri, Gr. Lat. Paris 1675 c. n. mss. v. d.; M.S.G.Q. 11, Meursius in Call.], in Iovem (δ 78), in Apoll. v. 25 (δ 78)

Casaubonus, I., v. Diogenes Laertius, Strabon, Suetonius, Theocritus (Lectiones Theocriteae)

Casaubonus, M., De Lingua Saxonica [(in: De quatuor linguis commentationis pars II), Lond. 1650 BLC: 996. 6. 24], p. 348 (B 595)

Catullus [L.M.O. 41, Cat. Tibul. Prop. Graecii, 2 vol. 1680, c. n. mss. v. d.; L.M.Q. 177, Catullus c. n. Vossii, Lond. 1684 (#45); DdM. 118, Cat. Tib. Prop.], Epith. Th. et Pel. 203-5 (A 529-31) v. Vossium. I.

Cicero [L.M.Q. 112, Cicer. Op. Omn. c. n. Gruteri Amsterd. Elzevier, 1661; 0. 46, Epist. ad Att. ex Recens. Graevii, 2 vol. Amsterd. 1684 (#239); L.M. O. 47, Epist. ad Fam. Graevii, 2 vol. Amsterd. 1687; L.M.DdM. Epist. ad Fam. Manutii (Cic. Epist. Fam. Pauli Manutii, Plantin Antw.

1568 (#105)), Cic. de Officiis, ex Recens. Graevii, 1688 (#159, Amsterd. 1691)], Ep. I. ad. Att. l. 1. (X 33), De Divin. II. xxx. 64 (B 327), De Fin. V. xxiii. 49 (μ 184-91), Tusc. Disput. III. lxiii. 77 (Z 201)

Cuper G,. De Consecratione Homeri [L.M.Q. 174, Amsterd. 1683], p. 63 (Flyleaf I. (b)), p. 78 (Hyp. ad Od. α), p. 108 (Hyp. ad tit. h.Apoll.), p. 130 (ad tit. ΚΑΤΑΛΟΓΟΣ ΝΕΩΝ)

Dio Chrysostomus [not in Catalogus Librorum], Or. II. c. 29. 22 (Flyleaf I. (b)), Comae Enc. {Appendix I. p. 307-8 ed. Arnim} (X 402), cf. Leopardus, Em. II. xix, infra.

Diodorus Siculus [L.G.F. 70, Diod. Sic. Bibliotheca Historica Rhodomani, Gr. Lat. Hannov. Wechel 1640], I. xlv. 6 (I 381), I. xcvi (ω 11-3), III. (A 423), III. lii (B 814); III. lix. 6 (B 595), III. lxvii. 3 (B 594-600), IV. iv. 6 (B 662), IV. xxxix. 2 (λ 601-2), IV. lxxxv. 1-7 (λ 572), V. ii (ι 109-11), V. xvi. 23-24 (B 519), V. xvi. 56 (I 404), XV. xv. 52 (M 243)

Dionysius, Orbis Descriptio (Περιήγησις) [L.G.O. 61, Dionysii Orbis Descriptio c. com. Hil, Lond. 1679], III. 871 (Z 201)

Diogenes Laertius, Vitae Philosophorum [L.G.O. 74, De Vitis Philosophor. c. n. Casauboni 1615 (#211, 1692); L.M.DdM. 58, De Vit. Philos.], VI. 53, Diogenes Cynicus (Θ 95)

Dionysius Halicarnasseus, De Compositione Verborum [L.G.F. 71, Scripta quae extant omnia Historica et Rhetorica Sylburgii, Gr. Lat. Francof. Wechel 1586], iii (π 16), iii (π 176), xv (X 476), xv (P 265), xv (X 220-1), xv (ι 415-6), xv (Σ 225), xvi (Π 361), xvi (M 207), xvi (E 402), xvi (λ 282), xvi (ι 289-90), xvi (B 211), xvii (ι 39), xx (λ 593-4), xxxiv. 4-8 (Flyleaf I. (d)), xvi (Δ 452-3)

〃 Antiquitates Romanae, I. lxii (Υ 219), I. lxiii (B 327), VII. lxxii. 3 (Ψ 710), V. lxxiv (A 238), VII. lxxiii. 2 (Π 165-7), Vii...? (Z 479. The only case where J.G.'s reference is not justified)

De Demosthene (περὶ τοῦ Δημοσθένους δεινότητος) {Opusc. vol. 1 p. 220. 5-8. ed. Usener} (Flyleaf II (b))

Ennius, Annales [L.M.Q. 149, cum comm. Columnae, Neap. 1590; L.M.Q. 1̇4̇9̇ <sic> , c. comm. Merulae. LB. 1595], ii {= p. 683ff. ed. Skutch} (Z 506-11, cf. N 130)

Etymologicum Magnum [L.G.F. 77, Etym. Magn. Aldo 1549 {798. 45 ed. Gaisford}], (P 105), κύπρις (h.Aphr. 57-8)

Eustathius, Commentarii in Homeri Iliadem et Odysseam (Παρεκβολαί) ed. N. Maioranus et M. Devarius, Roma 1542-1550 [not in Cat. Libr.], ε 281, κ 124, κ 464-5, π 403, φ 15, φ 296, Ω 23-30, Ω 130-2.

Faber, T. vide Longinum et Lucretium.

Florus, Res Romana [L.M.O. 79. Florus Freinshemii Argent. 1655 (#153)], Lb. III. c. iii. p. 222 (O 684)

Gellius, Noctes Atticae [Stephani Paris 1585 (#23, 1573)], IX. ix. 12 (ζ 102-8: Aen. I. 502 ff.), IX. x (Ξ 353)

Harpocration, Lexicon [c.n. Maussaci et Valesii, LB. 1683 {p. 121 ed. Bekker}], Λικνόφορος (h.Herm. v. 21)

Herodotus, Historiae [L.G.F. 45, Herodotus, Gr. Lat. Francof. 1608; L.G.F. 44, Lond. 1679, ed. Jungermann], II. 50. 1.2.3 (ξ 327-8), II. 112 (δ 365-6), II. 116.3 (Z 289-92), II. 116 (δ 227-30), II. 116 (δ 351-2), IV. 28-9 (δ 85), II. 49 (λ 290-7)

Hesiodus, Erga kai Hemerai [L.G.Q. 65, ed. D. Heinsius, Plantin, Antw. 1603; L.G.O. 84, ed. J. G. Graevius, Elzevier], Erga v. 496 (ρ 225)

Hesychius, Lexicon Graecum [ed. K. Schrevelius, LB. 1668, c. n. mss. v. d. (#279)] ἀγανοί (N 5), ἀγκαλόν (h.Herm. 82), ἀναπλήσας (h.Herm. 41), ἐρεχθομένη (h.Apoll. 358), ἐπηλυσίη (h.Herm. 37), ἠπέδανος (h.Apoll. 316), κρεμβαλιάζειν (h.Apoll. 162), ληνοὶ (h.Herm. 104), λίκνῳ (h.Herm. 21), ὄγμος (h.Lun. 11), ὀρσολοπεῖται (h.Herm. 308), πλαταμών (h.Herm. 128), πρόκας (h.Aphr. 71), ῥικνοί (h.Apoll. 317), σαῦλα (h.Herm. 28), σατῖναι (h.Aphr. 13), τρώκτης (ξ 289), φηληταί (h.Herm. 49), φλίη (ρ 221), ψαφαλότριχα (h.Pan 32)

Hirtius, De Bello Hispanico [not in Cat. librorum], xxxi. 7 {Vol. III. p. 158, ed. A. Klotz}, (N 130)

Holstein, L. "Holsteinius in Stephanum de Urbibus [Gr. Lat. LB. 1684]", p. 121 (h.Nept. 3), p. 174 (h.Apoll. 446), p. 178 (h.Apoll. 26), p. 202 (h.Artem. 3), (vide Stephanum)

Homeri Vita (Vita Herodotea) {Homeri Opera V ed. T. W. Allen}, p. 195, l. 61ff. (β 225), p. 209 (H 220)

Horatius [L.M.Q. 146, Horatius c. comm. Cruquii, Antw. 1578 (#183); L.M.DdM. 55, Horatius, Juvenalis, etc. c. n. Rutgersii, Rigaltii ap. Stephanum], Ep. Lb I. Epist. II. 18-22 (α 1-22), Ep. Lb. II. Epist. II. 213-16. c. Cruquii notis ad 214 (ο 373), Sat. II. 6. 102-3 (I 200), Sat. II. 3. 9 (B 597)

Julianus, Symposion vel Caesares [L.M.Q. 119, Les Cesars de l' Empereur Julien par E. Spanheim, Paris 1683], vide Spanheim.

Justinus Apostolus [L.G.F. 55, Justinus Martyr, Graece ex Bibliotheca Regia, Paris apud Stephanum 1551], Epist. II. c. ii b: 4 (Θ 13)

Leopardus, P. F., Emendationum et Miscellaneorum Libri Viginti [L.G.Q. 81, Plantin, Antw. 1568], II. c. xix (X 402), viii. c. vi (ε 60)

Livius, Ab Urbe Condita [L.M.O. 50, cum notis Variorum et Gronovii, 3 vol. 1664, Elzevier, Amsterd. 1678 (#37)], vii. ix. 8 ~ x. 1 (H 92)

Longinus, De Sublimitate [L.G.DdM. 16, Dionysius Longinus ed. T. Faber. Gr. Lat. Salmurii 1663], viii (Hyp. ad Od. α), viii. 2 (λ 315-6), viii (λ 543), ix. 6 (Υ 54-65), ix. 10 (P 645), ix. 11 (O 605-6), xvii (κ 251-3)

Lucianus, Dialogus Mortuorum [L.G.F. 61, Luciani Opera Graece apud Aldum, Vent. 1503, c. n. mss. v. d.; L.G.O. 59, Lucianus Benedicti Gr. Lat. Salmur. 1619, 2 vol.], xix (B 698-702)

Lucretius, Rerum Natura [L.M.Q. 105, c. n. Tanaquilli Fabri, Salmurii, 1662, c. n. mss. v. d.; L.M.DdM. 117, ed. Lambinus, Paris 1565 (#18)], II. 24-26 (η 100-2), III. 1078 (Z 488)

Macrobius, Saturnalia [L.M.O. 53, Macrobii Opera c. n. Variorum etc. Recens. J. Gronovii 1670], V. c. ii (Φ 362-5), V. c. xxviii. 1 (A 423), VI. c. 1. 31-35 (N 130-1)

Martialis, Epigrammaton Libri, etc. [L.M.Q. 107. Vicenti Colesso in usum Delphini, Paris 1680, c. multis n. mss. v. d. ; L.M.DdM. 60 c. n. Scriverii et aliorum LB 1619 (#36), c. n. mss. v. d.; L.M.F. 103, Variorum Lutet. 1617; L.M.O. 77, Farnabii, Janson, Amsterd. 1645 (#21); L.M.DdM.115], Epigramm. VIII. Ep. 6. 11-2 (I 203), Apophoreta Ep. 81 (ad Tit. Batrach), De Spectaculis Lib III. v. 4 (N 5)

Meursius. J., Cyprus [L.G.Q. 89, Meursii, Creta, Cyprus, Rhodos], I. c. xiv et xv (θ 363), I c: xiv et xv (h.Aphr. 57-8)

Miscellanea Laconica [L.G.Q. 95, Meursii Misc. Laconica], xiv c. xi (h.Apoll. 411)

Ovidius, Amores [L.M.DdM. 41, Ovidii Opera c. n. Heinsii, 1661. apud Elzevier 6 vol. cf. ed. P. Burmann Amsterd. 1727 (#298)], III. ix. 25-6 (Flyleaf I (e))

Metamorphoses [L.M.F. 113, Ovidii Metamorphoses Farnabii, cum figuris; L.M.DdM. 116, Metam. Farnabii], ix. 217-8 (N 205)

Palladas, ex Anthologia Graeca [MS. Gr. F. 6, Anthologia ex Bibliotheca Vaticana; MS. Gr. F. 8, Anthologia ex Bibliotheca Palatina] l. 1. p. 153 {X 50. ed. Tauchnitz} (κ 338)

Pausanias, Periegesis [L.G.F. 64, Pausanias Xylandri, Gr. Lat. Francof. Wechel 1583], I. (Attica) ix. 3 (I 381-2), I. xvii. 5 (κ 513-4), II. (Corinth) xxi. 10 (Ω 609), II. xxv. 5 (B 571), II. xxvi (Δ 194), III. (Laconia) ii. 4 (T 179), III. ii. 7 (B 584), III. xxi. 5 (B 583), III. xxv. 7-8 (I 292), III. xxvi. 8 (I 292), IV. (Messen.) xxxi (I 293), VIII. (Arcad.) xvii. 6 ～ xviii. 6 (B 755), V. (Elis) xiv. 2 (N 389-90), V. xxiv. 11 (T 266), VI. (Elea) iii (E 395-7), VII. (Achaia) i.1-4 (B 575), VII. xxiv. 5 (Υ 404), VII. xxvi (Φ 75); VII. xxv. 13 ～ xxvi (B 573); VIII. (Arcad.) xiv. 4-8 (B 605); VIII. xvi. 3 (B 604), VIII. xxiv. 7 (Ω 527), VIII. xxv. 7-8 (Ψ 346), VIII. vi. 6 (B 606), IX. (Boiot.) xxix. 6-7 (Σ 570), xxxv. 4 (Ξ 267), v. 6-7 (λ 263), xxxvi. 3 (N 301), xxxx (B 101), X. (Phoc.) iv. 5 (λ 576-7), vi. 5 (μ 45-6), vii. 13 (υ 301-2), xxix. 4 (λ 325)

Persius, Satirae [L.M.DdM. 110, Pesius c. n. Bond; cf. Persius Casauboni, Paris 1615 (#50). p. 306-8], III. 105 (T 212)

Petrus Apostolus, Epist. II.c. 2 (cf. Steph. Thes. G.L.,vol. III, 1248G.)

Pindarus, Carmina [L.G.Q. 69, Pindarus c. sch. Gr. Romae ap. Calergum, 1515, c. n. multis mss. v. d.; L.G.Q. 64, Benedicti, 1620; L.G.DdM. 35, et 36, Pind., Sapph., Simonid., ap. Stephanum], Nem. VII. 20-2 (δ 724), Nem. VII. 53-54 (N 636-7), Pyth. II. 88 (δ 78), Pyth. IV. 277-9 (O 207)

Plato, Hippias Minor [L.G.F. 42, Platonis Opera Omnia c. n. Serrani Gr. Lat. ap. Stephanum, 1578], 363b 1-4 (Hyp. ad Od. α). cf. Cuper. De Cons. Hom. p. 78

Plinius, Historia Naturalis [L.M.O. 43, Plinius c. n. Variorum etc. LB. et Roterdam, 1669, 3 vol. (in Bibl. Wist.)], II. 107 (E 7), V. 37 (Z 201), VIII. 48 (T 126), X. 29 (τ 518-21)

Plutarchus [L.G.F. 49, Plutarchi Opera Omnia, Gr. Lat. LB 1655, 2 vol. {ed. Reiske, Lips., 1777}], Alexand. M. {vol. IV. p. 122 (54)} (Φ 107), De Fortuna (vel Virtute) {vol. VII. p. 345} (E 340), Pyrrus {vol. II. p. 788} (M 243), Sertorius {vol. III. p. 507-8} (δ 272), De Cupid. Divit. {Delacy et Einarson VII. 527 E. p. 34} (δ 74)

Pomponius Mela, De Situ Orbis [L.M.O. 84, Pomp. Mela, Gronovii; L.M.Q. 97, Pomp. Mela Vossii, Hagae Comitis, 1658 {cited by J. G. ad δ 356-7}; L.M.Q. 98, Vossii ad Pomp. Melam Appendix et Responsio ad Petr. Simonium (in Pomp. Mela ed. Abraham Gronovius, LB. 1722, #189)], Lib. II. vii. l. 50f. (δ 355-7).

Porphyrius [non in Cat. Libr.; probabiliter ex Sch. Gr.in Cod. Leid. Voss. Gr. F. 64], E 453, Z 234, H 336-7, I 61-73, I 381-2, Λ 354, M 258, N 443, P 143, T 72, X 431.

Propertius, Elegia [L.M.O. 41, Catullus, Tibullus, Propertius c. n. Variorum et Graevii. 2 vol., 1680, c. n. mss. v.d.], III. ix. 40 (B 824)

Ricaut, P., Histoire des Turcs [L.M.O. 107 {probabiliter, Histoire de l' état présent de l' Empire Ottoman, contenant les maximes politiques des Turcs, etc., Traduit de l' Anglois de Monsieur Rycaut, par M. Briot, Paris 1670; nouvelle edition, Amsterd. 1678, Dd.} BLC. <150. g. 3>], tom III, p. 24 (B 821)

Salmasius, C., Plinianae Exercitationes in Solinum, Paris 1629 [L.M.F. 93, 2 vol. {Trajecti ad Rhenum 1689 (#269)}], p. 846 {= 608 in ed. Traj. Rh.} (Flyleaf I (a)), p. 390 {= 219-20} (Λ 774), p. 572 {= 403bG-404aB} (O 717), p. 810 et 860 {= 569bB et 604bAB} (h.Artem. 5), p. 888 {= 624aF-G} (B 852), p. 899 {= 632aCDE} (Ψ 338), p. 927 {= 650bEFG} (φ 47), p. 928 {= 651aBCDEF} (M 455), p. 950 et seq. {= 668 et 669bG} (ϵ 60), p. 946 {= 664aE} (ζ 318), p. 1009 {= 710aF} (K 335), p. 1329 {= 935aA} (Ψ 454), p. 1331 {= 935bE} (Ψ 454)

〃 Exercitationes de Homonymis Hyles Iatricae [L.M.F. 94, De Homonymis etc., et de Manna et saccharo, Trajecti ad Rhenum 1689 {bound together with In Solinum in #269, supra}], p. 100 bC-F (ϵ 255)

Scaliger, J., In Catalecta [L.M.O. 277, Catalecta Vergilii c. n. Scaligeri LB.1617, c. n. mss. v.d. {#169, Scaligeriana vol. 2, 1. p. 21}], p. 164 (Batrachom. 35)

Scholia in Apollonium Rhodium [L.G.Q. 51, Apoll. Rhod. Argonautica c. sch. Gr. Stephanus, 1574], II. 942 (B 855)

Scholia in Aristophanem [L.G.F. 76, Aristophanes Comoedia c. Scholiis Antiquis et n. Biseti. Geneva 1607, c. multis n. mss. v.d. = UBU. ABHSS. MS. 1496 (I.A. 21)], p. 273 (I 270-1), in Acharn. 3 (Υ 157)

Scholia in Homeri Iliadem Manuscripta, in Cod. Leid. Voss. Gr. F. 64 {cf. L. C. Valckenaer, Opuscula Philologica Critica Oratoria, Tom. II. 1-152, Lips. 1809}: B 456-7, B 478-9, B 685, B 867, E 734, Z 4, Z 179, Z 226, H 99, H 198, H 298, H 409, H 433, Θ 58, Θ 158, Θ 189, Θ 203, Θ 368, Θ 444, I 378, K 384, Λ 390, Λ 574, Λ 597, Λ 629, Λ 637, M 459, N 6, N 563, N 576-7, N 588-9, N 683, N 685, N 686, N 773, Ξ 16[a], Ξ 16[b], Ξ 26, Ξ 36, Ξ 142, Ξ 179, Ξ 271, Ξ 383, Ξ 413, Ξ 433, Ξ 465, Ξ 479, Ξ 499, Ξ 509, O 36, O 71, O 88, O 94, O 146-7, O 445, O 449-51, O 511, O 541, O 563, O 597, O 598, O 610-4, O 628, O 645, O 657, O 712, Π 31, Π 150, Π 174, Π 228, Π 233, Π 261, Π 378-9, Π 475, Π 491, Π 504, Π 558, Π 569, Π 639, Π 642, Π 672, Π 825, P 128, P 393, P 564, P 663, P 761, T 1, T 68, T 131, T 152, T 183, T 221-3, Υ 125-8, Υ 404, Φ 542-3, X 147, X 165, X 251, X 295, X 318, X 325, X 328, X 356, X 375, X 408, X 414, Ψ 21, Ψ 29, Ψ 91, Ψ 157, Ψ 243, Ψ 330, Ψ 365, Ψ 368, Ψ 396, Ψ 420, Ψ 451, Ψ 506, Ψ 574, Ψ 677, Ψ 683, Ψ 730, Ψ 765, Ψ 791, Ψ 826, Ψ 845, Ψ 870, Ψ 871.

Scholia in Nicandri Pharmaca {cf. Erbse V. p. 68, Testim. ad Υ 125.; cf. Schol. in Nic. Alexipharmaca 138G} (Υ 425)

Scholia in Pindari Pythionicae Odam [{Vol. II. 65-76 ad Pyth. III. 14. ed. Drachmann}] γ 1-3 (h.Asclep. 1-2), in Nemeonicae Odam β init. (h.Apoll. 1). Vide Pindarum.

Scholia in Theocritum, Eid. 1. ad 34 {Casaubon, Lectiones Theocriteae ch. ii; cf. γενειάδες in Etym. M.} (π 176)

Seneca, Heracles Furens [L.M.DdM. 102, Senecae Opera Omnia, Lipsii, 1628; L.M.O. 171, Senecae Tragoediae, c. n. Scaligeri, Heinsii, etc.; L.M.DdM. 45, Senecae Tragoediae Farnabii, Elzevier, Amsterd. 1678, (#33)], 188-90 (Z 488)

〃 De Ira {Lb. I. ch. xx. 8, ed. A. Bourgery, Paris 1941}, Lb. I. (T 369 et Ψ 724)

Servius, Commentarius in Vergilium [non in Cat.] {Thilo-Hagen. Vol. I. p. 349, 20-22}, ad Aen. III. 67 (λ 36), ad Ecl. VIII. 55 {p. 101 Thilo-Hagen} (h.Apoll. 411)

Sextus Empiricus, Πυρρώνειοι ὑποτυπώσεις, III. xxiv {= p. 170, 27-8, ed. L. Bekker}, (Θ 13)

Silius Italicus, Punica [L.M.DdM. 172] III. 134 (Z 488) {cf. D. Heinsii Crepundia Siliana (#34) Cantabrigiae 1646, p. 40, on Silius III. 134, quoting Z 486-9}

Solinus Polyhistor [Salmasius, Exercitationes in Solinum], ch.1{= p. 26, 21-25, ed. Th. Mommsen, 1895²} (Ψ 764), ch. xxxix {= p. 183 Mommsen} (Z 179)

Spanheim, E., De Praestantia et Usu Veterum Numismatum, Roma 1664, 1671² [not in Cat.; in Wisteriana]. p. 487-8 (ad Hyp. Iliadis A), p. 479 (λ 520)

〃 Les Cesars de l' Empereur Julien [L.M.Q. 119, Paris 1683], p. 419 et seq. (E 734), p. 341 (σ 354-5), p. 403 (I 375-7), p. 330 (I 71), p. 334 (I 200), p. 459 et seq. (Γ 228), p. 60 (h.Herm. 499-50)

Spon, J., Voyage d' Italie, de Dalmatie, de Grèce et du Levant, 2 vol., Amsterd. 1679 [L.M.DdM. 119] V. de Grèce, p. 42 et p. 56 (B 519), p. 179 (B 547), V. de Negrepont. p. 245 (B 537), p. 264 (B 540), Retour à Ligur. p. 367 (B 520), Description de la ville d' Athen., Salamis p. 200 (B 557), p. 205 (B 562 Aigina) {The same transcription from Spon is found on Aigina in Aristophanes' Batrachoi, annotated by J.G.}, Voyage de Dalmatie, p. 101 (B 632)

Stanley, Th., Commentarius in Aeschylum [L.G.F. 80, Lond. 1663, sic CAT.; 1664 (#264)], p. 699f. <Cho. 16> (h.Herm. 331), p. 741 <Sept. 147-8> (Δ 101), p. 744 <Sept. 283> (K 460-1), p. 783-4 <Ag. 40> (B 327), p. 784a <Ag. 45> (B 759), p. 784b <Ag. 52> (λ 125), p. 797 <Ag. 587> (γ 273-4)

Statius, Thebais [L.M.DdM. 109, ed. J. F. Gronovius, Amsterd. 1653], IV. 178-9 (B 593)

Stephanus Byzantinus, De Urbibus [L.G.F. 51, ed. L. Holstenius, LB. 1684], p. 25 (h.Apoll. 243), p. 174 (h.Apoll. 446), p. 321 (h.Apoll. 224), p. 353 (h.Apoll. 425)

Stobaeus, Eclogae [G.L.F. 79, ed. W. Canter, Plantin, Antw. 1575], Lb. 50 (Tyrtaios) (Δ 447-8)

Strabon, Geographia [L.G.F. 58, Strabonis Geographia Libri xvii. c. n. Casauboni, Gr. Lat. Paris 1620 (#268)], I. p. 5 A-B (μ 1-2), III.p. 173C-174A (43BCD-44A) (μ 237-40), VII. p. 296-300 (N 5-7), VII. p. 330 (B 850) (l.v.), VIII. p. 338 (B 659) (l.v.), VIII. p. 342 (γ 366) (l.v.); VIII. p. 348 (H 135) (l.v.), VIII. p. 365 (γ 251), VIII. p. 370 (Δ 171) (l.v.), IX. p. 399 (T 445), XII. p. 765 (B 855) (l.v.: cf. Meineke, Vol. I. p. 765), X. p. 476 (τ 179), XI. p. 504 (T 189), XIV. p. 651-55 (B 867, cf. Meineke, Vol. III. p. 908-13), XVII. p. 798 (δ 477)

Suetonius, Vit. Caesarum [L.M.Q. ed. Casaubon, Geneva 1595 (#65); L.M.Q. ed. Graevius, Utrecht 1672 (#91)], Aug. 65 (T 40) (l.v.), Tib. 21 (K 246-7), Cal. 22. 1, 22. 4 (B 204, Ψ 724, σ 84 (l)); Claud. 42 (Ω 369), Nero 49 (K 535), Galba 20 (φ 426), Vesp. 23 (H 213), Domit. 12 (B 204)

Suidas, Lexicon [L.G.Fol.73 Porti. 2voll. Genev. 1619], ἀπείρητος (cf. Nr.3133, Vol.1. p. 281. ed. Adler) (h.Aphr. 120)

Tabern. Itiner. Pers. III. (B 546) (not identified)

Theocritus, Eidylion xvi [L.G.Q. 70, ed. D. Heinsius 1604; L.G. ... ed. Casaubon 1596], (Flyleaf II (a))

Thucydides, Historiae [L.G.F. 60, ed. Aem. Portus, Francof. Wechel 1594, in Wisteriana], III. 104 (h.Apoll. ad tit., 146, 165-72) (vv.ll.)

Valerius Flaccus, Argonautica [L.M.O. 179, D. Heinsius, Amsterd. 1680, Utrecht 1702 (#26)], III. 707-11 (A 234 ff.)

Velleius Patroclus {ed. G. Vossius, LB. 1654 (#79); ed. N. Heinsius, Amsterd. 1678 (#20)}, I. ch. 5. p. 4 (Flyleaf I. (c))

Vergilius, Aeneis [L.M.O. 42, c. n. Variorum 3 vol., 1680; L.M.DdM. 47, Farnabii ... ; L.M.DdM. 96, Heinsii, Elzevier, Amsterd. 1636, 1704 (#22)], III. 81 (B 327), IV. 365-67 (Π 33-35), VII. 462-66 (Φ 362-65), VIII. 208-9 (h.Herm. 73-4), VIII. 404-6 (Ξ 353), X. 361 (N 130-1), X. 467-8 (Z 488), X. 492-7 (Z 506-11)

〃 Georgica, I. 281-2 (λ 315-6)

Vossius, I. Catullus et in eum Observationes [L.M.Q. Lond. 1684 (#45)], p. 12 (ε 260), p. 78 (Θ 41), p. 79 (Δ 223), p. 153 (Λ 62), p. 201 (λ 325), p. 212 (Φ 59), p. 220-1 (T 140), p. 231 (μ 61), p. 247 'Schol. vet. in Hom. hactenus inedita' (Z 4, Z 402-3, Υ 74), p. 271 μετὰ Μέμνονας Αἰθιοπῆας (A 423), p. 296 (Z 480)

〃 In Pomponium Melam de Situ Orbis {cur. Abr. Gronovii, LB 1722 (#189)}, II. c. 7. l. 50-57 (δ 354-57); I. c. ix 4 Vossii obs. p. 362-73 (δ 477); II. c. 3 p. 455 (#45) (B 594); I. c. 9 (I 381)

〃 In Scylacem, p. 9 (B 712)

〃 De Nilo, (δ 477)

Weller (Wheler), G., Voyage de Dalmatia (cf. Spon, supra), I. p. 49 (η 112)

〃 Itinerarium no. 39, 40, 42 (ad Hyp. Iliados A)

Xenophon, Hellenica [L.G.F. 52, Opera Omnia Paris 1625], VII. 2. 9 (κλαυσιγέλως) (Z 484)

(日本学士院)